

朝夷巡嶋記

第二編

卷四

13  
704  
9



明  
書  
卷  
9

前川源七郎

明治三十八年  
十月九日  
購  
取

スプリング獨學 一冊 日本  
書記 神代卷 小本二冊

第11111111 獨學 一冊 藤高文先生著  
目録編至四  
編各五冊宛

皇朝戰畧編 八冊 近藤先生著  
彩色入

小學素讀本 二冊 共學之部  
書冊

洋算学をくえ 森先生著  
石西洋美術甲  
全冊

發兌書肆 大阪心齋橋橋筋  
前川源七郎梓  
北久寶寺町南入

手書き書籍のあらまし

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之四

東都 曲亭主人編輯

初輯第十七 磨死出を礪並の月  
夢を占まる黒川堂

朝夷三郎義秀ハ俱利伽羅山小てあうりなく怪起武者をえんといふ。  
騒だろ気色ハなくて。呵とらち笑ハ。汝ハこそ何のぞ。狐貉の化るか。は。  
戦死のめ。冤鬼ならん。調戲んぞ出さる。は。いで。近くよれ。目よめ。めんせん。  
又望一たとあふ。は。とく。い。一。歩。んと。刃。を。進。して。刀。の。鞘。よ。手。を。掛。き。件。の。  
武者ハ。還。り。く。兩。三。步。馬。を。乘。退。三。郎。ぬ。早。ま。あ。あ。あ。は。れ。ハ。狐。狸。の。類。ハ。  
あ。ら。ど。當。時。あ。ら。ど。擊。れ。る。平。家。の。士。卒。の。怨。灵。中。も。あ。ら。ど。密。中。に。た。  
り。あ。り。て。假。し。姿。を。あ。ら。り。う。且。く。其。処。よ。お。ち。お。あ。と。と。め。め。く。馬。を。

乗ら多し間四五尺隔る。菅竹が下の臥石は尻うちつけて。さそひゆる。某  
 陽人かきさる。和君が腰刀は輝きあまは近づくことかひびじ。ほろろか寄  
 ぬひそこむる。いひに怪しくもあろ。始ごころまへその名むる。八人の口碑は  
 傳(す)もむらむらぬ。見はるん。父義仲朝臣。ふろく憑れき。北國の合戦は  
 屢分捕功名あつる。岡田冠者親義が。世まな紀魂。まむらふ。さてもいひ  
 壽永二年五月十一日。平家の大軍十萬餘騎。搦手の大將軍。越前三位  
 平通盛。美濃守平知度。又追手の大將軍。小松の三位中將。惟盛。左馬頭  
 行盛。薩摩守忠度等。平家の上臈數を盡して。虎賁猛卒雲霞の如く。  
 礪並志雄の大路より。ちや越中國へ。ち入ると。安んじ。木曾殿。五萬餘  
 騎。六動寺の國府より。般若野の所河端へ。徐くと。推蒐と。あへ相後。かへ  
 八十郎藏人河内行家。足利矢田判官代義兼。楯六郎親忠。宇野弥平  
 四郎行平。今井四郎兼平。樋口次郎兼光。根井小弥太。行近。和君のおん母  
 巴の方。數なる。後とも。巧み親。美一族。岡田小二郎久美。信越。加北。名たる  
 勇將。枚舉。違あ。む。そのと。平家ハ。俱利伽羅堂。國見。猿馬場の  
 堂。彼此陣布。又木曾殿ハ。礪並山。黒坂の北の麓。垣生の八幡林より。松永  
 柳原を後。小つ。黒坂口を南。向ひて。整々と陣。と。あ。か。て。平家ハ。進  
 来。つて。兩陣。あ。相拒。と。五六段。ハ。過。さ。る。な。し。山中。嶮。岨。之。疾。視  
 あ。ぞ。わ。ら。う。その日。ハ。か。て。暮。れ。る。よ。平家ハ。切。処。を。憑。き。人。敵。も。寄。り。と  
 由。影。して。盾。を。敷。寐。は。堊。を。枕。し。睡。る。もの。な。う。と。五月。の。天。の。癖。か。し。か  
 腫。る。照。出。月。影。も。夏。山。懸。之。弥。暗。く。源。平。互。は。咫尺。を。ま。う。は。神。出。鬼。没。の  
 軍。機。微。妙。に。木。曾。殿。ハ。豫。く。より。五。萬。餘。騎。を。五。隊。よ。こ。う。ち。牛。四。五  
 百。頭。と。り。集。て。角。は。続。松。結。付。く。夜。の。深。る。を。ぞ。ま。ち。あ。ふ。の。と。記。樋。口

兼光ハ搦手(うち廻り)林富樫を相具して中山をうち登る。律原(推)  
 寄せて大鼓を鳴らし。貝を吹立樹の下萱下打建して墓目鎗を射させ  
 関を咄と覆る。今井根井巴の方一萬餘騎を引卒して。関を  
 合せて進みつ。一度は牛を彫てゐあちて。平家の陣へ追入れし。こま  
 田軍火牛の故事。今又ある。名將の謀合期して牛もろ共に突入る。その旗は  
 破竹の如く。さし平家の十萬餘騎不意を撃れて辟易し。一柱もさへほ  
 加賀國へ退やと。黑白も別ぬ黒坂の南谷を下るとして。先陣深谷へ滾  
 落し。後陣も繞て落累るをゆりやかめ。木曾殿ハ米配うも揮む。  
 味方と進めて透間もなく追撃か。平家久馬弥々なう。或ハ劍戟は  
 劈し。或ハ巖石よりち砕きて。さしは廣に南谷を人馬の死骸は埋たり。  
 さらよりこの谷を地獄谷と稱せり。この地一族太郎重義同小二郎

久義ホ比類を働死して久義ハ平家の上將右共備佐為盛と組んで遂  
 その元をとり。又重義ハ平家の侍館太郎貞康と血戦して矢庭は敵を撃  
 とうの又某ハ逃るを逐ひつ。この谷れちうゆく美濃守知度と半响あま  
 戦やう。乱軍のりあしが互に援る兵士なし。寄まや組んと馬乗あがく。  
 利を奪て奪ると組知度ハ平家は名々多力猛將なるもの。戦ひ  
 屈して浅瘡を負ひぬ。さしは攬る拳を放さば。採拉んと接あ程は  
 々々暗し。切込なり。共は疲勞して馬さへ蹠足定くあう。しが崖岸  
 我破と踏こして。両馬ハ主を乗せあが。千尋の谷へ墮と落さば。八鎧を  
 踏外して組る。隨は腦を碎し。此彼齊一命を傾して名をの。高嶺は  
 揚る。さう小松の三位惟盛ハ。越中前司盛俊上總介忠清ハ。救めて加賀  
 国宮腰佐良藏ある濱の月うりに残兵を集るもの。さほは其処の

溜りぬぞ勝て京より上まじ水曾殿ハ逃るを逐て平家を摂津州一討  
 走り。仙院を守護しされば上皇後白殿感大く。躬て勸賞せしむ。  
 後四位の伊豫守朝日將軍。拜任し。左馬頭を兼させ。みこい。身後  
 なまじも。死すもの。既ハ靈あり。吳い。くめ。のを監と。又。く。未来を知ること  
 あり。あ。り。て。和君と木曾殿の。人。子。たり。と。を。知。り。て。この。物。語。及。ぶ。り。の。こ  
 ろ。が。俱。利。伽。羅。の。合。戦。某。が。一。族。を。第。一。の。功。と。せ。し。れ。く。勸。賞。亦。他。  
 超。ま。バ。絶。て。恨。ハ。た。ら。れ。ど。の。い。う。あ。せ。ん。と。が。び。む。く。る。と。數。万。の。敵。と。り。共。よ。  
 この。谷。底。骨。を。と。り。て。三。挺。の。苦。を。脱。し。も。敵。の。怨。灵。八。萬。餘。騎。知。度。為。感。  
 大。將。也。夜。毎。閨。を。揚。箭。を。射。出。し。某。を。攻。撃。す。と。今。よ。至。て。十。九。年。一。月。間。ま  
 な。し。ら。で。勇。士。の。資。あ。る。を。竟。よ。出。離。の。時。な。ら。ん。と。あ。の。と。出。ま。き。の。よ  
 ま。で。絶。く。そ。の。人。よ。あ。ら。む。苦。一。地。年。月。を。歷。う。一。よ。時。あ。ら。れ。く。智。勇

兼備の一壮士。志。も。奮。縁。大。う。な。ら。ぬ。木。曾。殿。の。落。胤。多。し。和。君。が。た。り  
 ら。む。この。山。と。薄。暮。を。踰。り。あ。ら。む。百。万。騎。の。躬。方。は。ま。あ。り。て。地。を。ひ  
 づ。り。推。取。た。る。怨。敵。を。切。拂。ひ。勢。靡。け。この。谷。底。を。跳。出。る。は。數。萬。の  
 雙。ハ。な。や。遣。ト。と。を。彼。処。ま。で。追。蒐。す。つ。が。和。君。の。腰。は。帶。あ。り。俱。利。伽。羅。の  
 太。刀。は。憚。り。て。是。処。ま。で。ハ。追。跟。て。も。あ。ら。む。敵。地。を。脱。離。し。捷。速。快。飛。  
 地。を。ゆ。ん。と。皆。是。和。君。が。威。德。よ。し。や。され。ば。と。武。士。の。の。敵。を。お。お。り。く  
 他所。移。ら。ば。亦。是。ら。よ。か。恥。か。ら。ず。一。の。岑。か。俱。利。伽。羅。堂。あり。音。明。王  
 千。歳。の。滝。の中。より。出。現。し。て。越。の。大。德。は。拜。ま。さ。せ。り。大。威。德。の。美。場。を。れ。が。  
 堂。と。滝。との。間。を。擇。と。て。こ。が。觸。體。を。埋。め。た。べ。り。ま。じ。バ。不。動。の。威。神。力。と。有。縁。の  
 勇。士。の。資。を。借。り。て。永。劫。呵。責。を。脱。し。た。ん。恰。千。僧。万。卷。の。流。経。お。も。た。ん  
 功。徳。あ。ら。ま。今。より。和。君。が。影。を。立。て。その。久。後。ま。で。衛。ま。す。一。この。身。憑。あ。る

さんねは假姿を顯しう。努疑ひも家との声さ一よう此曇月を仰いで  
 美秀は心せも嘆息。原来和殿。縁なく固田尉者なるよ。いなる  
 所ありぬ。當時の合戦は七父が智畧軍の進退瞭然として視るごとく。  
 今更くうにたか親と面を對するありして懷舊は堪ざるのそ美秀不肖  
 小してのまご成とるなし。身も亦薄命なり。塵を翹かき苦や。和殿  
 既神靈あり。久後の吉凶禍福を巨細は示し。いふぞやと。叮嚀は  
 問きて親義沈吟ト。そを示さん難くもあ。後と人の為は天機を漏せハ  
 固より冥府の大禁なり。但過去のゆを述る。後車の戒とせん和君  
 みづく。覆明して禍を避け。抑鎌倉の古幕府。頼朝。梶原。古今を思ふ。あ  
 初高倉宮の令肯をあり。下が兵を揚てあり。むろ所絶て敵は  
 居あが。八州を併吞して。基を鎌倉に築くとい。自家の経営のそ小

ちく。朝廷のちんを先せ。忠勇美烈。木曾殿と日と同一て論をう。び  
 さ。又木曾殿。高倉宮の皇子。信濃の宮を主と。傳記。衛なるそく  
 義兵を起し。北國よ苦戦して。平家の大軍を討退け。逃るを追て上洛し。  
 鳳閣の守護として。上皇の宸襟をそ。休めたり。その忠の功莫大あり。  
 ち。小あり。官爵も大く。か。進ま。上皇の威。短くて。文もなく。武  
 小あり。鼓判官。舌頭。迷。果。木曾殿を憎せ。ひて。奏。由  
 用ひ。な。臆。鼓判官。討せん。企。ひ。人。僻。事。より。君臣。鮮。有。  
 不慮の狼藉。い。来。小。縁。由。を。推。た。安。徳。天。皇。平。家。よ。う。た。都。を  
 落。せ。せ。ひ。比。上。皇。ハ。此。彼。と。日。嗣。の。皇。子。を。え。ま。せ。あ。その。折。木。曾。殿  
 ち。ゆ。め。ま。り。し。く。信。濃。宮。を。と。奏。せ。ハ。舊。を。忘。め。ぬ。忠。臣。の。美。理。ハ。賢。た  
 諫。言。之。頼。朝。美。仲。東。北。より。美。兵。を。起。て。平。家。を。討。ハ。高。倉。の。宮。を。び

きのびよ。うら。せぬ。一件の言ハふ。して浄海法師。盛を封滅し。  
 上皇の宸襟を休め。人と思ハ。源氏を召させ。あひ  
 射させて。かれをせ。ひ。頼朝。美仲。齊一起。して海内を  
 掃淨也。根本。高倉の宮。う。あ。の美理。よ。信濃の  
 宮を。即位。即。あ。た。る。あ。は。な。く。て。あ。ひ。も。ひ。ぬ。女徳の。美。弟。  
 尊成皇子を。天日嗣。よ。定。わ。る。木曾殿。く。憤。て。事。觸。つ  
 あり。く。た。行。状。を。謀。叛。を。ど。い。わ。り。て。鎌倉。う。村。に。六。軍。  
 範頼。美。経。を。西。大。将。や。く。免道。瀬田。う。攻。入。と。ぬ。と。た。京。の。義。朝。が。  
 躬方。の。武。士。六。暇。あ。り。過。半。故。郷。へ。つ。も。あ。り。樋。口。二。郎。兼。光。八。藏。入。行。家。を  
 討。合。て。五。百。餘。騎。を。引。卒。し。て。河。内。國。へ。赴。た。し。木。曾。殿。を。誘。千。騎。ま。

過。は。勇。將。猛。卒。死。を。究。り。て。一。人。當。千。な。り。と。い。も。寡。ハ。衆。に。敵。が。く。て。  
 免道。の。隊。あ。り。攻。破。ら。れ。京。師。の。成。を。失。ひ。つ。木。曾。殿。ハ。主。従。七。騎。衆。津  
 の。原。を。移。れ。か。ハ。惜。ま。る。もの。か。る。う。ま。れ。ど。の。軍。は。う。豫。々。院。後。白。  
 鎌倉。木。曾。追。討。の。院。宣。を。か。下。され。の。あ。り。を。京。師。ハ。空。虚。の。を。窺。ひ  
 鎌倉。あ。り。軍。を。起。し。て。猛。に。討。く。上。臣。う。ども。武。衛。頼。朝。の。武。運。微。妙。く。て。木。曾。殿  
 唱。へ。る。の。外。八。州。の。外。を。征。せ。た。矢。石。を。犯。し。て。平。軍。と。戦。ひ。し。と。絶。て。な。し。  
 木。曾。殿。數。度。の。苦。戦。し。て。大。敵。を。追。退。し。その。功。莫。大。あ。る。を。猜。忌。て。君。父。の  
 仇。を。平。家。を。さ。し。お。か。忽。地。同。宗。の。美。を。忘。れ。く。躬。方。を。誘。ひ。あ。り。追。討。し  
 木。曾。殿。を。し。と。異。し。ち。ら。鎌倉。と。不。快。の。を。入。合。合。戦。を。も。め。り。う。ども。  
 つ。あ。り。な。後。に。頼。朝。ハ。嫡。家。之。私。の。怨。は。あ。り。て。朝。敵。ら。平。家。を。さ。し

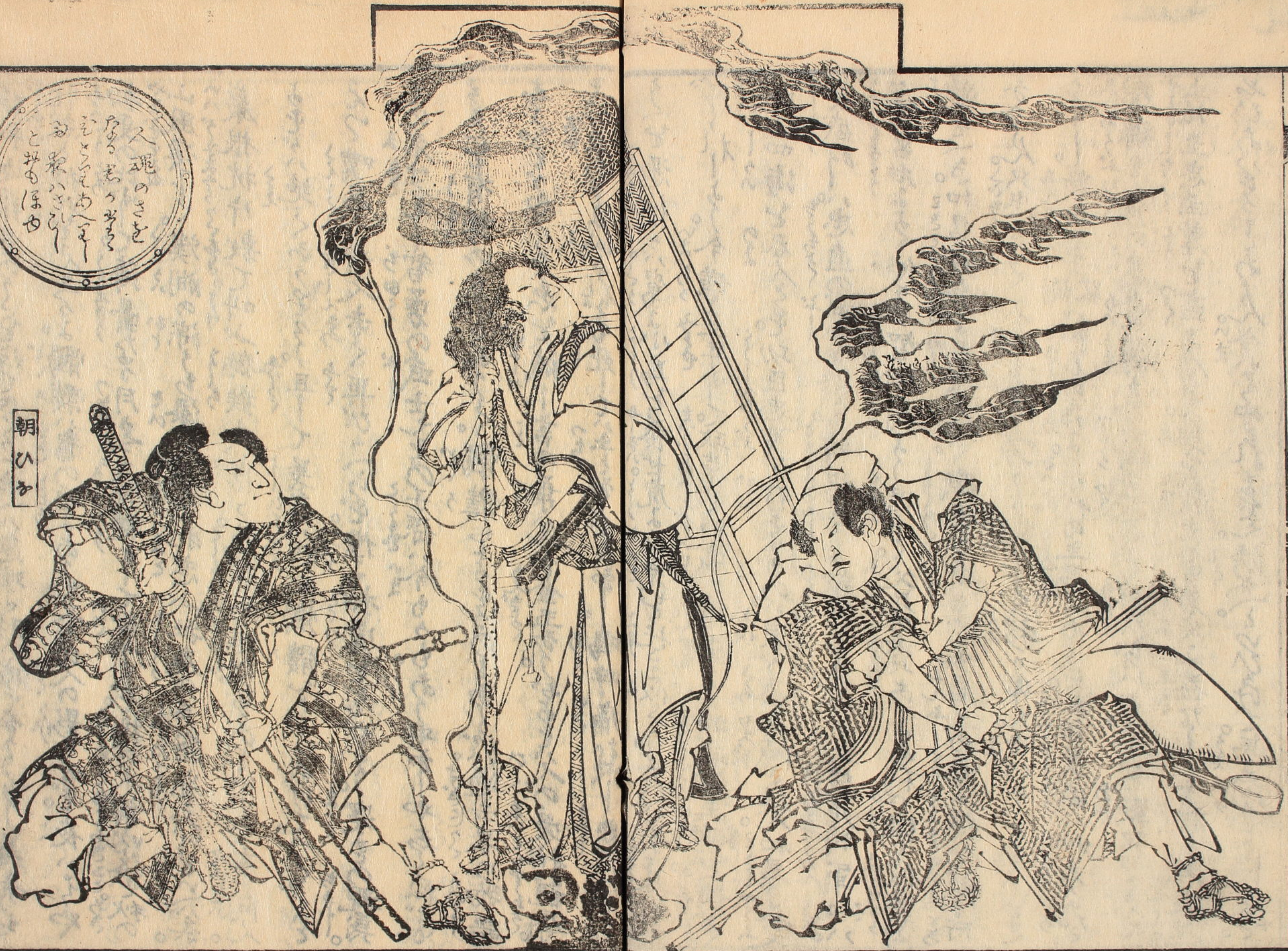
於何あつ彼人あいつと軍い走はた美仲あまのが美兵あまのを起おこせしるあつ一身いつの爲ためはわくも  
 高倉たかくらの宮みやに遠とほくをまのりて偏ひとは上皇かみみかの宸襟あきみを休やすめり朝敵あそくを  
 討滅うて且私わたくしの讐あやむを報あやひらるあつ死源氏累代しげんじりよりのちぢやくの恥辱かたじけなくを雪きよめり  
 頼朝よりともを疑うたりあつ頼朝よりともを疑うたりあつ其の淺あはれを好あむと結むすびて  
 遣つり赤心あかこころを示しんあつしあつ嫡男ちやくなん志水しすい冠者かんしや美高君あまのたかきみを人保ひとたもじあつしあつ鑑倉かんとく  
 遣つり武衛ぶゑい頼朝よりともも流石りやうしは辭ことばたゞて長女ながむすめ大姫君おほひめきみをめて美高君あまのたかきみ  
 妻あしあつ一旦いつたん和睦わくぼく整ととのふあつ木曾殿きそとの亡なびあつ比女ひめ塔た君きみ高たかさあつ整ととのせ  
 つあつ人の子ひとこなあつぬ姫ひめうあつふあつ死しをあつせあつしあつるあつあまあつりあつ奇刻あまに沙汰さたありあつぬ  
 狐疑こくぎありあつ癡あほうありあつ賞あや輕かろくあつて罰重ばつちゆうく小過せうこもあひあつえあつく  
 胞兄弟あふいを憐あはれあつ果は奥おくの高館たかたかありあつ判官はんくわん對たい腹はらを切きせあつ又また范頼はんらいを  
 修善寺しゆぜんじに幽殺ゆうころしてあつああつ一家いつけの杆城まもりを失うひ還かへて時政ときまさ美時あまを疑うはあつ孫まごの  
 うあつを憑たもたりあつ巴あつ鴛あつ小鳥こどりを養やしなせ虎とらよ承見じやうけんを托たくしてあつ似にたりあつ幕府まくふ荒  
 ざあつれあつ今いま僅わずか三年さんねん少すくで政草せいそう外戚げいせきの權重けんちゆうりあつ時政ときまさ幼主おんな頼朝よりともを挾かく  
 遂つひは四海しやうかいを吞のんとあつ功臣くわんじん忠美ちゆうびを存ぞんずあつるあつのハ渠みちがあつるあつ滅めされあつんあつ和君わきみが養父やしやふ  
 美盛あきもりの忠直ちゆうちゆうの武士ぶしありあつ時政ときまさ父子ふしが敵たてはあつ足あらあつば又また彼尼將軍あつ軍ぐん政せいハ  
 漢かんの呂后りこうよあつ似にたりあつ智術ちじゆつ固かりあつ遅おそくあつ父兄ふけいの資すけありあつああつれあつ誰たれが彼黨あつハ  
 敵たてをあつ和君わきみ鑑倉かんとくよあつ召めりあつ一いつをあつ職しやく禄ろくを受うめあつるあつ君父きんぷの爲ためは謀まうを献けんずあつ所  
 ありあつ只ただ忠ちゆうたあつなくあつ不美ふびもあつかあつみあつつあつ衛ゑいをあつ移うつりあつぬあつ世よのあつてあつをあつひあつをあつ見  
 新將軍あしんせうぐん頼朝よりとも和君わきみの爲ためは累代りよりのちぢやくの主君ぬしきみよあつわあつれあつ和わ田でん美盛あきもり和君わきみがあつ  
 嬰あひ褌ふんどし育よくの恩愛おんあい薄うすくあつを竊ひそくあつ諫いざなめあつく用もちひあつれあつむあつらあつちあつ歎なげ記きつあつて  
 止と止と至忠しちゆう至孝しちゆうを盡つくさんあつとあつ身みを殺ころすあつ君父きんぷよあつ益えきなしあつ説せつとあつ後のちに  
 ありあつむあつとあつわあつんあつ今いまもあつやあつれあつまあつ之これ誘いざなむあつといあつひあつて馬うまをあつ閃ひらりあつて來きつあつて

於何あつ彼人あいつと軍い走はた美仲あまのが美兵あまのを起おこせしるあつ一身いつの爲ためはわくも  
 高倉たかくらの宮みやに遠とほくをまのりて偏ひとは上皇かみみかの宸襟あきみを休やすめり朝敵あそくを  
 討滅うて且私わたくしの讐あやむを報あやひらるあつ死源氏累代しげんじりよりのちぢやくの恥辱かたじけなくを雪きよめり  
 頼朝よりともを疑うたりあつ頼朝よりともを疑うたりあつ其の淺あはれを好あむと結むすびて  
 遣つり赤心あかこころを示しんあつしあつ嫡男ちやくなん志水しすい冠者かんしや美高君あまのたかきみを人保ひとたもじあつしあつ鑑倉かんとく  
 遣つり武衛ぶゑい頼朝よりともも流石りやうしは辭ことばたゞて長女ながむすめ大姫君おほひめきみをめて美高君あまのたかきみ  
 妻あしあつ一旦いつたん和睦わくぼく整ととのふあつ木曾殿きそとの亡なびあつ比女ひめ塔た君きみ高たかさあつ整ととのせ  
 つあつ人の子ひとこなあつぬ姫ひめうあつふあつ死しをあつせあつしあつるあつあまあつりあつ奇刻あまに沙汰さたありあつぬ  
 狐疑こくぎありあつ癡あほうありあつ賞あや輕かろくあつて罰重ばつちゆうく小過せうこもあひあつえあつく  
 胞兄弟あふいを憐あはれあつ果は奥おくの高館たかたかありあつ判官はんくわん對たい腹はらを切きせあつ又また范頼はんらいを  
 修善寺しゆぜんじに幽殺ゆうころしてあつああつ一家いつけの杆城まもりを失うひ還かへて時政ときまさ美時あまを疑うはあつ孫まごの  
 うあつを憑たもたりあつ巴あつ鴛あつ小鳥こどりを養やしなせ虎とらよ承見じやうけんを托たくしてあつ似にたりあつ幕府まくふ荒  
 ざあつれあつ今いま僅わずか三年さんねん少すくで政草せいそう外戚げいせきの權重けんちゆうりあつ時政ときまさ幼主おんな頼朝よりともを挾かく  
 遂つひは四海しやうかいを吞のんとあつ功臣くわんじん忠美ちゆうびを存ぞんずあつるあつのハ渠みちがあつるあつ滅めされあつんあつ和君わきみが養父やしやふ  
 美盛あきもりの忠直ちゆうちゆうの武士ぶしありあつ時政ときまさ父子ふしが敵たてはあつ足あらあつば又また彼尼將軍あつ軍ぐん政せいハ  
 漢かんの呂后りこうよあつ似にたりあつ智術ちじゆつ固かりあつ遅おそくあつ父兄ふけいの資すけありあつああつれあつ誰たれが彼黨あつハ  
 敵たてをあつ和君わきみ鑑倉かんとくよあつ召めりあつ一いつをあつ職しやく禄ろくを受うめあつるあつ君父きんぷの爲ためは謀まうを献けんずあつ所  
 ありあつ只ただ忠ちゆうたあつなくあつ不美ふびもあつかあつみあつつあつ衛ゑいをあつ移うつりあつぬあつ世よのあつてあつをあつひあつをあつ見  
 新將軍あしんせうぐん頼朝よりとも和君わきみの爲ためは累代りよりのちぢやくの主君ぬしきみよあつわあつれあつ和わ田でん美盛あきもり和君わきみがあつ  
 嬰あひ褌ふんどし育よくの恩愛おんあい薄うすくあつを竊ひそくあつ諫いざなめあつく用もちひあつれあつむあつらあつちあつ歎なげ記きつあつて  
 止と止と至忠しちゆう至孝しちゆうを盡つくさんあつとあつ身みを殺ころすあつ君父きんぷよあつ益えきなしあつ説せつとあつ後のちに  
 ありあつむあつとあつわあつんあつ今いまもあつやあつれあつまあつ之これ誘いざなむあつといあつひあつて馬うまをあつ閃ひらりあつて來きつあつて



人魂のさき  
たつてあつた  
まことあへて  
おれはさし  
とほのほゆ

朝ひか



俱利迦羅堂のくを投てゆくると忽地は形滅てかうりたり。義秀は  
 忙然と彼此をえつるよ。觸髅は舊の処はありて。又その人の影もせむ。夜はちや  
 初更の比りて薄曇なる月。朦朧として出中を梢の木葉吹落を秋の  
 山風凄しく。溪澗の涼うち添く峯は牝恋小牡鹿の声寤寐びびといふ糸  
 巖根枕片敷て叫ぶ。獼猴もいぼく腸を割媒となすのち中て事問人  
 よもがハ絶くみろとく。且て美秀ハ件の觸髅をどうあけてつくづく  
 といつ嘆息し。昔人去く再びういらむ。僅は枯骨をともえり。寔はこの親美  
 その名せえし智勇の武士。その子孫ハ今もも。あやわやあやわねども。  
 るをを有縁のものともうく。觸髅をよもろのこめ。過去来の物語  
 あり。とぐゆくをを滅し。言の葉のみか金玉あり。おのこハ人の榮枯寵辱  
 その差あつるよ。似たりも死てハ土とあざらわ。嗚呼痛む。悲む。

請ふ仕してその如く埋人とむらう。くらく。堂のほとり。赴く程は前面  
 よりある行脚の女僧。綱代の笈を脊すく。錫杖高く衝鳴ら。行  
 ちがふやうやう。背向は信と透して。觸髅を取らんと。とく。美秀  
 冷笑ひて拂除人とあつれども。千引の石を推して。椽を去らず。立る形勢。  
 多ひうけねが驚とし。う。そがま。左より引つけて。拉んと。争ふ。おな  
 山踏を登り。禪衣被る。一個の行者。近づく。まよ透して。走り。蒐て  
 件の觸髅を。これ。と。各縁。と。美秀ハ。か。ほ。と。と。く。あ。あ。ら  
 こと。と。刃を。及り。左右を。柱。と。煉の。剽。姚。と。あ。こ。も。劣。ら。ぬ。子。迷。の。卷。術。  
 洲濱輪違。鼎足。跟廻して。ハ。衝。と。さ。れ。拂。ハ。又。も。冬。樹。の。蔭。よ。み。め。と  
 う。於。薄。月。夜。時。移。る。ま。で。挑。と。つ。三。人。觸。髅。よ。も。ろ。と。を。う。け。て。引。あ。ふ  
 谷。合。よ。う。り。お。と。せ。ハ。觸。髅。ハ。石。よ。炭。夫。と。碎。け。く。隠。と。立。伸。る。燐。火。よ

三人顔見ありて。その和子なるが母御なり。一三三の紅葉ふらふ。これの  
 あり。と西三歩。遠巡して三方へ立退た。諸膝を齊一殿と拍音は驚死  
 覚く目をゆけ。是華昏国の一夢なり。俱利伽羅山よゆ紀ふして。  
 明王堂の欄干は頰杖つれて臥ともかく。その夜を明を秀秀ハ身を起し  
 つ腕を拵りて傾く月をさち仰た秋の夜なきと比み。途の疲勞は  
 熟睡をんもや曉がこまなり。あは地名も俱利伽羅のこが腰に  
 威徳よありて。いぬる壽永の討死せし。岡田冠者親義が怨敵の呵責を  
 脱き彌腰をこれに托せし。と久後のみまよ。況示されし言の葉ハ  
 むほ早底は箇づの夢を覚くも現の如し加以曇る夜は融骸を取ると  
 争ひし斗藪の女僧ハ月来日るなり。とあふ養母なり。たうらうら  
 一三三へ異なる行脚の打撈して共は挑こし為体何の故も。いふは  
 がし。是も亦親義が灵魂の所為なり。と母ハ恙なく道心堅固に  
 廻国も。その形容を夢よんせし。秋泡沫夢如し浮屠家ハ悦ぬ悪  
 むよ足らぬらあぐ。いなり五夢の辨あは。との極なり。いふは。とあはれなく  
 まれ彼彌腰を素ねえむ。とひさし。明王堂を立出ると千歳滝は  
 うこよ。赴け。鮮明の月隈なく照らして。崖裁る深山寂寞。とんは  
 ろうらう。松の下は物しをあれと立し。果して一個の彌腰あり。とあはれ  
 熟視する。夢よんつと相似。是は。と感悟し。試みる。融骸を  
 他所へ移さんとまるとき。その重たし。磐石を抱る。異なり。舊の処へ  
 之せ。その軽きと木葉の如し。原来この樹下へ埋め。と示現あり。と  
 更に曉る。溪澗ある竹を伐して土掘り。地を掘ると五六尺件の  
 彌腰を瘞りつ。ほとり。近き立石の天たあるを。輾しよせて。又推立て

墓石と一筆斗の毫を授けし。岡田尉者親義之墓と一行は書  
 つりく。樹の條おても向つ。俱利伽羅の大刀引接て南谷のこを疾視  
 朝夷三郎義秀らよあり。朝夷三郎義秀らよあり。平家の怨灵迷ふ  
 退散せよと心して。伐攘ふも数回刃をさし。鞋をかきめて。石傍を揃ひて  
 漱に明王堂よりより。且く祈念する程は。天のわめくと明を。かくて  
 砥並の嶽をぐる。婦員の黒川まで来る。此一三がらのそらなる。  
 観音堂へ。あるよあひぬ。當下一三ハ声高やに。ゆけく。遠く走。近  
 づた三郎ぬ。なると遅きや。友鶴のの。あさる。あ。夫婦ら  
 待つびて。きの。日。おん。の。ひ。竭。が。苦。  
 金異の帰郷を。折ら。心。黒川。馬頭観音。借。後  
 是。の。せ。ハ。義秀。の。微笑。彼。佐。味。竺。内。ハ。松。在。ら。む。

つも。彼。処。まで。ゆく。序。名。所。古。蹟。を。ん。お。と。て。お。ひ。起。せ。旅。な。る。は。  
 待。り。ま。で。日。を。歴。る。某。の。老。人。の。そ。く。物。詣。ハ。罪。を。深。し。  
 うち。賸。活。つ。これ。より。足。の。運び。を。早。めて。ち。つ。れ。立。ち。還。る。程。あ。る。  
 再。と。夢。や。昨。夕。の。夢。よ。一。三。が。禪。衣。を。被。り。ハ。さ。さ。さ。さ。と。も。ひ。ま。り。  
 なる。観。音。詣。の。と。さ。よ。彼。我。也。と。あ。り。祥。あり。記。余。ら。ハ。母。も。恙。多。今。是。  
 廻。国。を。あ。り。て。疑。ひ。か。し。と。憑。く。あ。の。心。を。つ。つ。と。收。め。人。や。告。す。  
 多。さ。さ。さ。さ。の。日。の。黄昏。よ。一。三。より。共。岩。神。ある。宿。所。を。て。り。是。ぬ。の。夕。  
 園。宅。の。奔。走。友。鶴。お。が。飲。び。の。為。体。人。の。問。答。さ。よ。精。細。よ。写。し。出。  
 はん。は。く。く。一。た。と。さ。あ。ん。の。一。條。ハ。省。略。ぬ。却。説。今。茲。ハ。果。敢。ち。墓。  
 お。う。璞。の。年。立。上。り。建。仁。二。年。二。月。の。天。稍。長。閑。な。り。ハ。義。秀。ハ。又。  
 さ。ら。は。行。装。を。整。く。下。野。へ。の。入。と。ハ。當。下。あ。る。ト。判。五。夫。婦。ハ。一。三。

共侶煉るや下野ハ敵地之彼乃野太郎とや入カ謀り身と害  
 せんともつるやをバ豫てと吹ぬや吉見ハ良友ありともや  
 知巴おあはれと父母兄弟もあの中もあはれ訪ても夏ハ  
 かくてもわれしと辭齊一禁められバ秀秀て頭をうち掉支鶴也  
 きのみあつともそのつものともあはれ之況て老る人ハみ  
 るともありあはれ然とて仇をむして前送は背人と云が  
 あり後ハ謀るもそれは美邦井平ホが賢あり何ぶと云  
 狂歴ハ吉見と訪人爲のそあはれ春ハ師之健田翁の小  
 夏ハ養父の大祥忌辰ハ相當了舊里ハおは憚りあはれ  
 赴たて許我の間中寺あり墓系して師恩を謝せんとも  
 いひた吾儕ハ一所不住のの男子ハ四方を家と云といひ  
 地ともあはれん形ハおは憚り後者も沙汰ありともつ  
 引い下り厄ハ遇ふともあはれ後者ハ足廣縁中ハ却  
 られつる念ハおのく自愛おひねと統倫ハ後ハ再ハ  
 亦もなく衆皆嗟嘆あはれ且く判五が妻ハ備は侍る友  
 多ひつるものちあはれ又上坐ハ小際をまめ三郎阿月  
 ありあはれぬおはれつる遂てまはれ苗もあはれぬと  
 有身之帯も程はありはれつるおはれつる女見  
 ありを察しぬらと立之を更ういつはわつ侍  
 とも春の下辭違とも西三月ハ信れをくはれ  
 必しも縁と結びけれ心も死多う彼も  
 うち任せぬ愛顧より易うな友鶴も如此ありぬら

月報二編卷四

十一

忘まかりも母の後方より退却して坐す涙さしぐさなり。程に美秀の心づきも  
 只ひとり。岩神を首途して日よ歩之夜も宿も九夜十日と旅宿ごらねて  
 先下総ゆを起たる。翌ハ師の亡日なり。その日よ許我は急一六間中の  
 野寺へ詣つ。先師の一周養父の三回ごらる寺をさう行くと誓ひはす。此ハ  
 老僧云云のりせ告て布施駈多れが腕て近郷より法師を集食を齋  
 経を流と二夜三日よ及びたり。こまの雜費ハ箱判五が豫く資する所  
 なるべし。追薦の法會果もなれば美秀ハ秀作が墓へ詣て別を告遙か  
 安房のくを拜て。養父の菩提を祈念しつ。許我は相識る里入およ  
 送られく野木の驛あき袂を分ちひらう下野へ赴く程に煙あわゆる  
 孤郎の柳紅あつき田家の桃世ハ日よまわして暖た去歳のその日も彼  
 ころより。足利へと起行する跡生の比よありまなり。

作者云義秀の謙倉に生まると安房人とするの仇を撃亡命しつ。圖  
 らざ下総の許我の寓居し。更下野足利あり。学校に入らんとして果  
 さに加賀の小松へ赴き及びく。不憶も越中なる巖神の杖と駐め  
 舊故の場。美婦を娶りてく。處ると僅小暮月よ追ふむ。又下総に  
 旅宿しつ。その師と養父の年忌吊ひ今又足利へ赴きて。再友を  
 訪人として。譬ハ過海の船の港湊し。歌ふが如く。その居る野久し。を西く  
 如みるゆとらむ。或ハ蛇蝎鬪體の怪ある。或ハ怨雙山賊のりある。とて  
 地上の風波小惱さる。かまは美秀建保の役。敵瓜破と困を出海し。海  
 こころを山こころち巡るのそる。弱冠浮浪の為体心亦嶋めらうといひ。

初輯第十八

苗頃時の濁水  
 客去雁の春霜

吉見冠者義邦の曩も義秀乃小別也。比并平と亦その主なる時夏も  
 召交さる。主後とて疎隔するをぬ彼を名ひとて父及之靴を隔く  
 癪を搔く。あちのときあひのうら時夏不憚り。坊へうとるく年暮て  
 簷下の梅小鶯の来鳴く朝の八重霞里より雪ハ消初と遠山も稍春の  
 多々入とて弥生へ近づくも。加北より下とてと義秀が信ゆえといふ  
 心と想像る。山河百里を隔て不言告中へ便宜り。か折陸奥  
 へ按察使藤原泰衡が残黨大河太郎兼任が一子。修羅五郎經任と  
 いふの竊み先亡の餘類を集めて厨川の古城へ蜂起し伊豫判官義經  
 のあし子るると偽稱し。ととく逆意公奮ふ。粗そのゆめえあり。彼藤  
 原泰衡へ鎮守府將軍秀衡が子らうといぬ。文治五年夏四月泰衡ハ  
 父秀衡が送訓は叛きて國衡と相違り。衣川の城を攻め判官經をうち滅し

首級を鎌倉へあつせとて恩賞へとけり。その沙汰も及ばぬ。曩  
 ら泰衡皇命を蔑如して義経に荷擔する。その罪を軽うす。今  
 さら替へ出さる。許さざるのる。ととく幕府朝へさう大軍をたて  
 奥州へ進發し大関山に國衡を殺し。糟部も泰衡が頭を獲ると合戦  
 僅九日と過む。陸奥出羽二國平ぬ時。秋九月あり。このち建久元年  
 の春二月泰衡が家臣大河兼任謀叛をく。膽澤郡平泉の柵を破ると  
 中へえ。千葉公常胤比企判官能員ホ追討の將命を奉り平泉へ推  
 上せとて遂にその柵を抜き逃ぐ。追ひつ栗原より兼任を替へると  
 是より奥羽を異し属し。今に至り十二年。白波の風騒ぐとちかく緑林  
 條を鳴さる。又經任が及逆のゆえあり。現る比の風雨の件の經任  
 ちが軍用も充ん為り。多く野客山家を相譚と。近四より遣し官物

を盗とせ民財を奪とせしむ。こも兵厨川の柵に積貯へ進むとんとて教  
 郡と畧し退くとんとてその巢を成るの謀をたるととんとて。岩崎  
 菊田白川よりこもり常陸下野の間ちかひ人のさう長閑るしとちかく戸頂と  
 固く賊を御ぐを勢とせり故あるまゝいゆる正治二年の冬十月鎌倉より  
 頼家卿後三位と叙し左衛門督と任じらるる去年正治三年即ち改て建仁元年の春正  
 月足利よりと任任賀佐の綱物併に義兼の舅執權時政への贈りの金浪珠玉  
 武具巻絹ると數の小御駄小附の布と。鎌倉へちかひせりとちかく正治二年  
 つくむくわあゝとそそのひふれいのいのの校野の船橋をこもるととんとて數十人の瘠者出て  
 義兼の使者某甲を砍らる。輕率奴隸馬奴小を獲まじり物残らるる  
 奪とせりとちかく踏火暗したる。未曾有の珍寶の品は義兼愚将一  
 あととちかく外圍を憚らる。このこ鎌倉へちかひせりとちかく怒れ押へ恥れ忍びと。

再び彼進物を舊の如くそとせしむ。野の武吏少宰領とせし鎌倉へちかひせり  
 とら比より郡監目代義兼の密意を兼と。ちかひとちかく兵を部し彼盜賊  
 ちかひ捕入とちかく間ある時ちかひ穿鑿せしちかひとちかく警衛せしちかひはかち今茲  
 とも民間より盗とせしちかひとちかく人々を警衛せしちかひはかち今茲  
 建仁二年の春ちかひとちかく経任かちちかひとちかく人々を警衛せしちかひはかち今茲  
 偷見に修羅五郎が餘類とせしちかひとちかく人々を警衛せしちかひはかち今茲  
 互はとちかくちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかく  
 賊を擄捕するのちかひとちかく賞賚を賜はかちちかひとちかく益の雑談とせしちかひとちかく書  
 つくむくわあゝとちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかく  
 絶ちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかく  
 鳩便ちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかくちかひとちかく



赤貝の莊容小春田の苗四郎とらめめありけり。その子藁二郎とらめめ  
 羊よと見よあるまじく美邦仕つ。研作のるみ管のく。二真成る  
 ありの元奉公年来よりい。この春身の暇を多りて親里へ還り。り  
 その代の小断り。後方うけける鳴子の引太郎とのみめ。元吉見へ  
 約束をきこ。頃も如月のまゝ。田と鋤畑を  
 うらふ。そのる果さ。三月の節供よりい。この日親苗四  
 郎へ。元吉見へい。いと。任の引太郎は髪結せ洗をえ。布子と被せ  
 古。衣葛籠と畏の鶏卵を齎。こ。義邦の宿野へ。いと。頼  
 忘野の小松が下。推支を袖。熟睡臥る大漢あ。立。て。ん。ふ  
 その面魂。瘴あ。野容る。そのと。引太郎は伯父の袂を密と引。り  
 一。あ。退。指。耳。被。偷。見。り。い。ぬ。比。村。て

物取界を走る。面貌又怒りあり。伯父公は何と見ゆ。彼奴が衣乃蔽と  
 ころ。懐。と。頭。法。十。結。あ。ま。と。ぬ。瘴者。と。と  
 雅。偷。見。を。捕。の。數。賞。を。り。と。守。の。御。を。り。や  
 吉見。見。の。牽。物。は。彼。奴。を。捕。く。あ。う。入。索。の。准。宿。を。の。ひ。後。  
 ち。相。彈。へ。苗。四。郎。沈。吟。く。汝。較。計。り。と。い。も。醒。る。毛。を。吹。き  
 疵。を。求。ん。再。入。と。密。語。へ。引。太。郎。は。使。あ。ん。ど。行。で。ふ。さ。ら。つ。れ。吾。侪。も。手  
 果。相。撲。ぬ。村。で。二。を。争。ふ。の。伯。父。公。の。老。も。助。骨。剛。も。え。ん。と  
 索。を。被。人。と。常。鳥。を。と。り。易。う。り。る。と。い。せ。苗。四。郎。点。隙。て。引  
 太。郎。が。脊。負。る。首。筋。其。処。あ。ら。せ。き。麻。索。を。や。引。解。を。その。枕  
 方。と。後。方。の。近。づ。た。と。楚。と。あ。え。起。人。と。さ。る。起。と。立。ぎ。母。を。合。と  
 搦。え。足。を。捉。へ。引。倒。し。て。そ。索。を。被。る。け。瘴。者。の。榻。め。れ。て。睡。と



やと平

苗四郎  
殺し時  
五頭平と  
謀る



刀野ノ時

此小癖ハさめ々人眼ハ睜リ。苗を切アキ。怒れどもその甲斐交る。罵たその  
 途。阿容と追まるとして吉見の之を牽き。浩如ノ刀野太郎時夏を  
 春の日消。花をさぐ。遠騎不出。馬奴ハ遙小後。井平。後  
 後。途の。小癖者ハ豫々相織る。早蠅の五頭平。驚死。聲を  
 繩より男を。其の故を。苗四郎ハ引太郎共。忘野の芝生  
 小癖者を。為体を。又牽立。時夏  
 声を。且く等。馬より。袴の皺を伸。又苗四郎。對ハ。此土民。この癖者を。その功  
 又。折。索被。中途  
 索。断。倒。逃。側。刀野太郎。執  
 の縁者。當領主。疎。小計。癖者を。一處とせ  
 と。引太郎ハ。引太郎ハ。冷笑。雅人。も。功名。と  
 ち。僕。管伯父。勸。捕。癖者を。一處とせ。と  
 又。苗四郎。使男。連。吾。吉見。由縁。の。い。ハ  
 の。其。知。彼。刀。糸。進。客。武。藝。を。な。と  
 境。垣。脱。結。叔。儀。の。締。縛。縛。解。例。ハ。遺。ハ。一。の。さ。あ。お  
 日。の。雨。縷。り。と。せ。い。い。ハ。太。郎。小。目。を。注。せ。立。ま。人。と。は。時  
 夏。怒。背。小。満。と。面。色。忽。地。火。の。如。く。過。言。り。土。民。們。其。知。る。退。れ。と。扱。く  
 仰。さ。る。小。目。ハ。引。太。郎。ハ。敬。馬。き。さ。ら。し。葛。籠。瓜。あ。ろ。癖。者。を  
 うち。捨。と。引。と。引。つ。知。時。夏。ハ。刀。小。乳。の。下。ろ。破。と。破。る。灸

所あると血氣の仕伎塊礫を擡觸とくし頻しばしばに打うちくは苗四郎も才さいと  
起おこしと後のち復またるる時とき夏なつが後のちよとと組くむ左ひだりのうと振あかると足あしと花はなと  
丁ちやうと蹴ける蹴けきと撞ぶと轉まるる五ご頭とう平へいの背せを縛むすめたる儘ままりて衝つと  
よせと苗四郎が背せを楚こと蹴け躪ふ身みを壓おしと動うごせとこの隙ひまの時とき夏なつの  
引ひ太郎たろうがうちの傍そばに礫いしもあちとち身を反ひり踏ふ込こて又また下した大おほ刀やいば臂うでのあこ  
まを破やぶつと叫なびとあへも臥ふかぬあひせうける砂すな飛と礫いしの時とき夏なつの眼め  
眩くらしくと醫い居い小こ横よこ地ぢと坐まる透とほぬるると引ひ太郎たろうハ慌あわ忙わき身みを起たと  
腹はらをうんととる箱はこは已い前まへより馬うまの籠かごとらとち荷おりてを井い平へいハ衝つと  
出いて立た寒さむい内うちに刃やいばの光ひかりが射やり射やり引ひ太郎たろうが首くびハ地上ちのへに落おちると  
時とき夏なつの禁いめえと涙なみだともは眼まなこ中なかに砂すな飛と礫いし拭ぬひの仆おきと苗四郎なむしろうが身み  
前まへに廻まわりよせと刺さとる且かつ彼か此こをええと小こまは入いれとるると一ひとつと五ご頭とう

平へいが索あひを断き釋かもむやく血ち刀やいば拭ぬひ納いくく彼か処こへ来きと指さして五六町いむろ乾ぬ  
る茂しげ林りんの中なかへ退ひけバ井い平へいも馬うまを牽ひつとそらと三さん入い樹じゆ陰かげに集あひぬぬれ  
刀やいば野の時とき夏なつが癖くせ者もの五ご頭とう平へいを救すくひる縁ゆかり故こを尋たづねと彼か修しゆ羅ら五ご郎らう経けい任にんの奥おくの  
膽い澤さばありあり野の客きやく山さん豪ごうを近ちか國くにへとち遣つはし就あ中ちゆう下げ野の結むす城きやう朝あさ  
足あ利り織ををそのうてへで躬み方かたに引ひ入いれとと早はや蠅あぶ五ご頭とう平へいと名なのよ  
小こ賊ぞく野の副ふて去さ歳さいの冬ふゆより當あ國くにへと遣つはしとる結むす城きやう固かたより  
忠ちゆう美みの武ぶ士し之の美み兼かハ時とき政せいの女むすめ婿むこたるをりて能たく密ひそ意いを通とほせし  
たし只ただ刀やいば野の時とき夏なつの執と権けんの縁ゆかり者ものなとと娼せん酒しゆの為ためハ志こころを移うつす利り  
あつと誘いふ動うごく易やすにりて定さだめと告つぐあは五ご頭とう平へい竊ひそかに学まなぶて学まな校がう  
游あそ学がくの諸しよ生せいは打う扮はん時とき夏なつは面めん湯ゆして撞ぶと遺い物ぶつもその心こころを樂たのせ親おやく  
潭たんハ厚あつく交まじりて遂つひに件けんの機き密みつを告つぐと時とき夏なつハ一ひと淺あ及および愉たのしく諾うけひ

五頭平も物と贈てあり。催促せり。さうさかろ。一大事を。輒く謀ておきよしなる。時夏進退究りて推辞んと欲せしが。既駁の賄賂を受て。是バ今さう。辭もあざむ。が。年来時政の資を蒙り。又義弟の蔭。立ても。傲るもの。癖あり。物として。足ると。なく。貪りて。飽こと。せむ。いよく。不良の心。きりて。信と。多ひつくと。あれ。竊。五頭平を。招たよせ。この。一。淺等。用。ハ。あね。ど。あ。さ。如く。足利家の。執権の。女。婿。多。密。意。を。告て。相。譚。さ。う。け。い。う。の。あ。ら。び。う。言。下。次。コ。ウ。出。き。後。は。バ。百。遍。悔。ひ。千。遍。悔。へ。も。及。ん。や。と。う。て。今。又。一。淺。あり。筒。様。と。と。耳。を。引。よ。せ。彼。拜。仕。の。賀。儀。と。して。夥。の。貨。を。馬。一。員。足。利。家。より。鎌。倉。へ。進。ま。り。辞。の。趣。詳。よ。説。示。せ。バ。五。頭。平。ふ。ろ。く。鉄。ひ。て。淺。足。の。日。子。路。次。の。方。位。問。定。め。謀。い。お。せ。て。俄。頃。小。賊。を。召。集。め。今。茲。云。月。の。下。流。挾。野。津。に。埋。伏。して。件。の。進。物。を。棄。ひ。と。し。時。夏。も。配。合。して。小。賊。を。他。郷。へ。走。ら。せ。その。身。ハ。姿。を。窺。し。て。お。け。足。利。の。苗。う。ろ。く。再。て。便宜。を。窺。し。程。の。日。に。く。沈。醉。して。苗。四。郎。も。搦。られ。辛。く。時。夏。を。救。れ。う。間。結。休。題。當。下。時。夏。ハ。檄。の。株。尻。を。う。けて。五。頭。平。を。招。た。近。つ。け。和。主。を。と。く。大。膽。なる。挾。野。津。の。一。淺。より。追。捕。せ。ま。も。最。重。く。四。境。ハ。夥。兵。あり。一。旦。ハ。救。を。い。へ。ど。落。し。遣。は。死。路。か。和。殿。ハ。く。と。も。あ。ら。ま。り。や。と。い。は。れ。く。五。頭。平。頭。を。搔。た。酒。の。の。牙。を。忘。野。の。芝。生。よ。雲。時。解。臥。して。土。民。の。為。に。搦。られ。ハ。面。目。も。な。死。趣。舎。の。國。の。四。境。に。守。兵。を。置。き。用心。かく。の。如。く。あ。ら。ま。り。し。て。脱。去。る。へ。死。謀。を。示。し。ぬ。へ。と。他。事。な。く。い。ハ。時。夏。ハ。も。を。又。死。て。沈。吟。下。辞。既。あ。ら。ま。り。及。バ。苦。肉。の。計。な。く。で。又。救。た。た。り。も。な。し。一。且。和。殿。を。傳。く。足。利。家。へ。遞。与。べ。し。然。る。と。死。ハ。四。境。の。守。兵。も。罷。れ。ん。と。疑。ひ。し。その。守。兵。た。ら。及。び。て。獄。卒。に。錢。を。遺。て。

五頭平も物と贈てあり。催促せり。さうさかろ。一大事を。輒く謀ておきよしなる。時夏進退究りて推辞んと欲せしが。既駁の賄賂を受て。是バ今さう。辭もあざむ。が。年来時政の資を蒙り。又義弟の蔭。立ても。傲るもの。癖あり。物として。足ると。なく。貪りて。飽こと。せむ。いよく。不良の心。きりて。信と。多ひつくと。あれ。竊。五頭平を。招たよせ。この。一。淺等。用。ハ。あね。ど。あ。さ。如く。足利家の。執権の。女。婿。多。密。意。を。告て。相。譚。さ。う。け。い。う。の。あ。ら。び。う。言。下。次。コ。ウ。出。き。後。は。バ。百。遍。悔。ひ。千。遍。悔。へ。も。及。ん。や。と。う。て。今。又。一。淺。あり。筒。様。と。と。耳。を。引。よ。せ。彼。拜。仕。の。賀。儀。と。して。夥。の。貨。を。馬。一。員。足。利。家。より。鎌。倉。へ。進。ま。り。辞。の。趣。詳。よ。説。示。せ。バ。五。頭。平。ふ。ろ。く。鉄。ひ。て。淺。足。の。日。子。路。次。の。方。位。問。定。め。謀。い。お。せ。て。俄。頃。小。賊。を。召。集。め。今。茲。云。月。の。下。流。挾。野。津。に。埋。伏。して。件。の。進。物。を。棄。ひ。と。し。時。夏。も。配。合。して。小。賊。を。他。郷。へ。走。ら。せ。その。身。ハ。姿。を。窺。し。て。お。け。足。利。の。苗。う。ろ。く。再。て。便宜。を。窺。し。程。の。日。に。く。沈。醉。して。苗。四。郎。も。搦。られ。辛。く。時。夏。を。救。れ。う。間。結。休。題。當。下。時。夏。ハ。檄。の。株。尻。を。う。けて。五。頭。平。を。招。た。近。つ。け。和。主。を。と。く。大。膽。なる。挾。野。津。の。一。淺。より。追。捕。せ。ま。も。最。重。く。四。境。ハ。夥。兵。あり。一。旦。ハ。救。を。い。へ。ど。落。し。遣。は。死。路。か。和。殿。ハ。く。と。も。あ。ら。ま。り。や。と。い。は。れ。く。五。頭。平。頭。を。搔。た。酒。の。の。牙。を。忘。野。の。芝。生。よ。雲。時。解。臥。して。土。民。の。為。に。搦。られ。ハ。面。目。も。な。死。趣。舎。の。國。の。四。境。に。守。兵。を。置。き。用心。かく。の。如。く。あ。ら。ま。り。し。て。脱。去。る。へ。死。謀。を。示。し。ぬ。へ。と。他。事。な。く。い。ハ。時。夏。ハ。も。を。又。死。て。沈。吟。下。辞。既。あ。ら。ま。り。及。バ。苦。肉。の。計。な。く。で。又。救。た。た。り。も。な。し。一。且。和。殿。を。傳。く。足。利。家。へ。遞。与。べ。し。然。る。と。死。ハ。四。境。の。守。兵。も。罷。れ。ん。と。疑。ひ。し。その。守。兵。た。ら。及。び。て。獄。卒。に。錢。を。遺。て。

目代八嶋室平は賄賂少く和殿を救ひ平一事件の嶋室平八某と交書を  
 絆を謀るは便宜の友と和殿一旦獄舎を繋れその支黨を問ふと此吉見  
 美邦が汲引ゆく鎌倉殿へ進せぬ賀儀の貨物を集らぬ美邦ハ  
 豫てあり。経任は同意せり。是こそ其の亡父範頼の怨を報ん為なりとそ  
 當國ふこの外は内応の武士なし。と真あるは首伏せば美邦捕ら  
 れんがくて和殿ハ獄屋を踰闕隙を潰る脱去するも美邦の科  
 重犯ありて和殿の追捕ハ緩やうならんこの外ハ施すべき謀絶てか  
 後ハなほ幸ひならんと真実ごちて相後ハ五頭平をくち点既寔は危犯  
 計略あるも萬死をせし一生を保つとあれらよあはれはぬがごとく人々  
 ろくの計ひぬへと立地は諾ひて時夏竊は執びて馳く五頭平に索を  
 被て井平をぞ招たる。このと死媪子井平ハ一反あまう退たり。ゆくる

杉馬を繋ぎまが刃ハ草を折敷く密談を洩きくぬやゆえぬあはれ  
 ちく召を隨は応もあま主の母と人本はまよバ時夏莞尔とち笑て終  
 るが密謀をたぐるはひつらん所存あふべいと云井平擬議する気色を  
 否かへ声の低くしうハ定うよまをいむ何れも。と問うせば時夏もま  
 うち笑て汝ハ去歳の夏の比美邦許をうりうり心ゆとなくあひり。其を  
 存せるとなく進平のそなうに曩ハ主の意中を察して逃んとしたる  
 莊客を一步も走らせむ。お留一り賞せし。あれはあまうあまうも。お留  
 疑ハこの五頭平ハ志のびくよま宿所へ入つるもの。認めとぞあらんむん。  
 この儘目代八嶋は逸与せハ更は救ひ出さへぬ。絆のあまをぬるとの秘やく  
 と口を緊やく五頭平が縄をとらせ樹下は立よりみづら馬を牽出して  
 閃と乗る足掻をよめ。そがまハ島室平が宿所へ赴れ。呼は馳て

ありとに對面し某々すも遠騎して之を志野のほとりて人を殺し  
 物を畧る癡者をもつてはまはるる一がく主後に入踏むで生拘つるを  
 責問し渠は原是於羅五郎経任が間謀者之當国吉見は内応のゆ  
 ありて安を襲ひ徘徊してそが便宜を候といひてあは輕りふる罪人  
 歸宅を及ぶむれは宜披露をせりといふ言委を告ぐら室平大さ  
 歎びて駭兵して彼癡者を縁類近く牽居させつりく視るは面魂現尋常の  
 めのあはれはそ名を問は五頭平と名告ぬるまひて鞠向をせり且獄舎  
 牽立させ時夏を勞ひてその武畧を稱賛しその領主は披露せ必鎌倉  
 上達せしむらばその勸賞は本領をへり召出されぬと更々踵を  
 旋走りて師任も亦和君の爲よ力を竭して提擲べし吉左右を候ひて  
 いれり時夏喜悅は堪む小膝を進りて閑然し日西山は傾く比三  
 別を告井平をぬく還る程は忽地は馬を駐めて頻りに後方を見しは  
 井平は名あはるるをいそぐ走り近つたるその時夏声を低りし汝を  
 何とあはれは彼二人の下郎奴の何知りなるものありん今さうその名を問ふ  
 由なり汝は再び彼れへ赴た彼風声をきくとあは走るとそを告ふ彼奴が  
 親族里人おは死骸の母をよ集合え吉見は由縁のものことその只うう  
 なる人なりとせむの心もとる紀所あり宿所へ程遠くはばれは騎こへ  
 えむとくといそがせは井平はろの中よ天の祐と歎びて一淺は及ぶと領  
 義邦はくまるとはあるよもなく三月の節供は紙離の立つを如く又加  
 小松の信を心まむは廣光と美秀がむをいそむあはんとやあんと想像つ  
 瞻仰る天子幽は出三日の月その晝昏はひけなく井平が本つは淺良井が

告<sup>つ</sup>りて美邦主後<sup>みくにのみちのち</sup>討<sup>う</sup>ちた<sup>り</sup>なり。輕<sup>かろ</sup>て刺<sup>さ</sup>す<sup>り</sup>招<sup>ま</sup>ね<sup>り</sup>入<sup>り</sup>る<sup>に</sup>。廿廿平<sup>にじゅうにじゅうへい</sup>ハカ<sup>ハ</sup>海<sup>うみ</sup>喘<sup>あは</sup>死<sup>し</sup>止<sup>ど</sup>む。  
 浅<sup>あ</sup>良<sup>ら</sup>并<sup>な</sup>ぐ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>わ<sup>る</sup>。一<sup>い</sup>碗<sup>わん</sup>の湯<sup>ゆ</sup>を飲<sup>の</sup>喝<sup>く</sup>して。そ<sup>の</sup>ら<sup>い</sup>り<sup>と</sup>吻<sup>くち</sup>と息<sup>いき</sup>をつ<sup>き</sup>後<sup>のち</sup>方<sup>はた</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。  
 美<sup>み</sup>邦<sup>はう</sup>のほ<sup>ろ</sup>う<sup>と</sup>近<sup>ちか</sup>く<sup>と</sup>声<sup>こゑ</sup>を密<sup>ひそ</sup>ま<sup>り</sup>。聲<sup>こゑ</sup>急<sup>いそ</sup>か<sup>れ</sup>ば安<sup>あ</sup>否<sup>ひ</sup>を訊<sup>と</sup>ひ別<sup>べつ</sup>後<sup>のち</sup>の情<sup>なさけ</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。  
 その故<sup>ゆゑ</sup>ハ箇<sup>こ</sup>様<sup>やう</sup>と如此<sup>ごと</sup>の<sup>と</sup>り<sup>あり</sup>。と<sup>し</sup>嚮<sup>むか</sup>ひ<sup>に</sup>刀<sup>や</sup>野<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>夏<sup>あつ</sup>が忘<sup>わす</sup>野<sup>の</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>こ<sup>ぞ</sup>。五<sup>ご</sup>頭<sup>とう</sup>平<sup>へい</sup>と  
 以<sup>も</sup>癡<sup>ち</sup>者<sup>しや</sup>を生<sup>な</sup>拘<sup>こ</sup>束<sup>そく</sup>する<sup>に</sup>。莊<sup>しやう</sup>客<sup>かく</sup>二人<sup>にに</sup>を破<sup>やぶ</sup>殺<sup>ころ</sup>せし<sup>に</sup>。聲<sup>こゑ</sup>の趣<sup>おもむ</sup>。又<sup>また</sup>五<sup>ご</sup>頭<sup>とう</sup>平<sup>へい</sup>と相<sup>あ</sup>謀<sup>ぼう</sup>り<sup>に</sup>。美<sup>み</sup>邦<sup>はう</sup>を  
 陥<sup>おと</sup>し<sup>し</sup>。渠<sup>みち</sup>を救<sup>すく</sup>ふ<sup>に</sup>。奸<sup>けん</sup>計<sup>けい</sup>の顛<sup>てん</sup>末<sup>まつ</sup>を告<sup>つ</sup>ぐ<sup>に</sup>。美<sup>み</sup>邦<sup>はう</sup>主<sup>しゆ</sup>後<sup>のち</sup>う<sup>ち</sup>。驚<sup>おど</sup>き<sup>或</sup>恨<sup>うらみ</sup>を  
 或<sup>ある</sup>ハ怕<sup>おそ</sup>れ<sup>を</sup>。襟<sup>えび</sup>をよ<sup>せ</sup>額<sup>ひたい</sup>を合<sup>あ</sup>ひ<sup>い</sup>。う<sup>ち</sup>せ<sup>ま</sup>。と<sup>し</sup>ひ<sup>ら</sup>く<sup>の</sup>。謀<sup>まう</sup>を向<sup>むか</sup>ふ<sup>に</sup>。廿<sup>に</sup>廿<sup>に</sup>平<sup>へい</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。  
 あ<sup>ら</sup>ど。三<sup>さん</sup>六<sup>りく</sup>計<sup>けい</sup>走<sup>そう</sup>す<sup>に</sup>。と<sup>し</sup>今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>竊<sup>せき</sup>は他<sup>た</sup>郷<sup>きやう</sup>走<sup>そう</sup>と<sup>し</sup>危<sup>き</sup>殃<sup>やう</sup>を避<sup>さ</sup>む<sup>に</sup>。又<sup>また</sup>以<sup>も</sup>目<sup>め</sup>代<sup>だい</sup>ハ<sup>は</sup>鳴<sup>な</sup>ハ  
 子<sup>こ</sup>も。犯<sup>はん</sup>人<sup>にん</sup>既<sup>すで</sup>に名<sup>な</sup>を指<sup>さ</sup>す<sup>に</sup>。云<sup>い</sup>ふ<sup>に</sup>。此<sup>こゝ</sup>ハ陳<sup>ちん</sup>謝<sup>しゃ</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。如<sup>ごと</sup>く以<sup>も</sup>目<sup>め</sup>代<sup>だい</sup>ハ<sup>は</sup>鳴<sup>な</sup>ハ  
 時<sup>とき</sup>夏<sup>あつ</sup>と交<sup>ま</sup>じ<sup>り</sup>。篤<sup>あつ</sup>領<sup>りやう</sup>主<sup>しゆ</sup>六<sup>りく</sup>執<sup>しやく</sup>権<sup>けん</sup>の女<sup>によ</sup>督<sup>とく</sup>あ<sup>ら</sup>む。時<sup>とき</sup>夏<sup>あつ</sup>を疑<sup>ぎ</sup>ふ<sup>に</sup>。還<sup>かへ</sup>て兇<sup>けう</sup>刃<sup>にん</sup>を疑<sup>ぎ</sup>ふ<sup>に</sup>。  
 又<sup>また</sup>彼<sup>か</sup>莊<sup>しやう</sup>客<sup>かく</sup>枕<sup>まくら</sup>をな<sup>ら</sup>す<sup>に</sup>。命<sup>いのち</sup>を其<sup>その</sup>處<sup>ところ</sup>に隕<sup>おち</sup>せ<sup>し</sup>。六<sup>ろく</sup>堆<sup>たい</sup>の真<sup>まこと</sup>偽<sup>いつはり</sup>を辨<sup>わ</sup>ん<sup>な</sup>。

潔<sup>けつ</sup>白<sup>はく</sup>を憑<sup>たも</sup>り<sup>に</sup>。危<sup>あや</sup>く<sup>と</sup>蹤<sup>あと</sup>を暗<sup>くら</sup>せ<sup>し</sup>。卻<sup>かへ</sup>り<sup>に</sup>。日<sup>ひ</sup>裏<sup>うら</sup>に告<sup>つ</sup>ぐ<sup>に</sup>。如<sup>ごと</sup>く某<sup>たがひ</sup>時<sup>とき</sup>夏<sup>あつ</sup>の  
 真<sup>まこと</sup>の家<sup>いえ</sup>僕<sup>へい</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。且<sup>かつ</sup>く<sup>と</sup>は<sup>は</sup>後<sup>のち</sup>よ<sup>め</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。勢<sup>いきほ</sup>ひ<sup>を</sup>。と<sup>し</sup>ほ<sup>ろ</sup>が<sup>れ</sup>ば<sup>は</sup>且<sup>かつ</sup>く<sup>と</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。と<sup>し</sup>あ<sup>ら</sup>い  
 狼<sup>ろう</sup>戾<sup>れい</sup>野<sup>や</sup>心<sup>しん</sup>主<sup>しゆ</sup>と憑<sup>たも</sup>り<sup>に</sup>。足<sup>あし</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。脱<sup>だつ</sup>れ<sup>に</sup>。去<sup>さ</sup>る<sup>に</sup>。と<sup>し</sup>久<sup>ひさ</sup>し<sup>に</sup>。去<sup>さ</sup>る<sup>に</sup>。六<sup>ろく</sup>月<sup>げつ</sup>朝<sup>あさ</sup>夷<sup>い</sup>  
 ぬ<sup>を</sup>。と<sup>し</sup>郊<sup>きやう</sup>外<sup>がい</sup>に送<sup>おく</sup>す<sup>に</sup>。日<sup>ひ</sup>共<sup>とも</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。地<sup>ち</sup>を去<sup>さ</sup>る<sup>に</sup>。と<sup>し</sup>久<sup>ひさ</sup>し<sup>に</sup>。去<sup>さ</sup>る<sup>に</sup>。六<sup>ろく</sup>月<sup>げつ</sup>朝<sup>あさ</sup>夷<sup>い</sup>  
 尉<sup>じゆう</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。留<sup>とど</sup>め<sup>り</sup>。多<sup>おほ</sup>く<sup>と</sup>。時<sup>とき</sup>夏<sup>あつ</sup>ハ利<sup>り</sup>を誘<sup>さ</sup>ふ<sup>に</sup>。恩<sup>おん</sup>美<sup>み</sup>ハ叛<sup>はん</sup>き<sup>に</sup>。逆<sup>さか</sup>賊<sup>さく</sup>  
 経<sup>けい</sup>任<sup>にん</sup>ハ一<sup>いっ</sup>味<sup>み</sup>。と<sup>し</sup>支<sup>し</sup>黨<sup>たう</sup>と角<sup>かく</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。領<sup>りやう</sup>主<sup>しゆ</sup>の調<sup>てう</sup>負<sup>ふ</sup>を集<sup>あ</sup>む<sup>に</sup>。尉<sup>じゆう</sup>者<sup>しや</sup>ハ<sup>は</sup>閉<sup>へい</sup>ん  
 と<sup>し</sup>衆<sup>しゆ</sup>入<sup>にゅう</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。欺<sup>あざ</sup>む<sup>に</sup>。天<sup>てん</sup>の網<sup>あみ</sup>。脱<sup>だつ</sup>れ<sup>に</sup>。と<sup>し</sup>今<sup>いま</sup>う<sup>ち</sup>。此<sup>こゝ</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。後<sup>のち</sup>よ<sup>め</sup>  
 と<sup>し</sup>死<sup>し</sup>ハ賊<sup>さく</sup>徒<sup>と</sup>。君<sup>きみ</sup>子<sup>し</sup>ハ渴<sup>かつ</sup>れ<sup>に</sup>。盗<sup>たう</sup>泉<sup>せん</sup>を飲<sup>の</sup>む。廉<sup>れん</sup>士<sup>し</sup>ハ嗟<sup>あ</sup>れ<sup>に</sup>。食<sup>しょく</sup>を受<sup>う</sup>む。是<sup>こゝ</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。  
 去<sup>さ</sup>る<sup>に</sup>。時<sup>とき</sup>至<sup>いた</sup>る<sup>に</sup>。幸<sup>さい</sup>小<sup>せう</sup>。と<sup>し</sup>棄<sup>す</sup>る<sup>に</sup>。尉<sup>じゆう</sup>者<sup>しや</sup>ハ役<sup>やく</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。身<sup>み</sup>を脱<sup>だつ</sup>れ<sup>に</sup>。  
 某<sup>たがひ</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。要<sup>えい</sup>時<sup>とき</sup>も猶<sup>なほ</sup>豫<sup>よ</sup>。と<sup>し</sup>起<sup>おこ</sup>す<sup>に</sup>。准<sup>しゆん</sup>備<sup>び</sup>あ<sup>ら</sup>む。某<sup>たがひ</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>。其<sup>その</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。  
 昔<sup>むかし</sup>も<sup>ら</sup>ん<sup>な</sup>。と<sup>し</sup>時<sup>とき</sup>夏<sup>あつ</sup>ハ莊<sup>しやう</sup>客<sup>かく</sup>が尉<sup>じゆう</sup>者<sup>しや</sup>ハ所<sup>しよ</sup>縁<sup>えん</sup>あ<sup>ら</sup>む。と<sup>し</sup>ひ<sup>ら</sup>く<sup>の</sup>。と<sup>し</sup>ひ<sup>ら</sup>く<sup>の</sup>。



その名をかくる宿所も定らざらん。あまののすせとよくいひてを逃り又  
 某を死骸のほろへ遣ふ。稍黄昏なりしう。天の祐と竊み飲ひ彼如く赴く  
 おもひちして歩道を走ると瞬息に危窮を告ぐるをばう。方は是神明  
 佛陀の冥助よこそと正首は意中の機密を脱示せば。後主は感佩しく  
 霎時嗟嘆の声を絶む。さうその時。彼癖者五頭平とやんと生拘りし時。其  
 殺されたるそのれ共の誰やある。あまの由縁ありしに。ばけは殊更によ使あり  
 彼奴これと主後がまはるは定らざらん。あまの有也。此の関をなす  
 縁頼の雨をさきと引閉て殺されたる僕が親と後才といひ。ひの裡面を  
 めあり。食糞地て色を失ひ行燈の灯は向て暗を定めく。く視るよ。  
 便是別人ありむ。いねる比刃の暇を乞て赤貝の御より。蒙二郎のれ。こ  
 いちと再び果して面を見あはり。あまの當下蒙二雨戸を引閉。端行る  
 裾をかろして。潜りく進み入り。力祢们との驚。あまの僕竊まらぬ。う。  
 おか。あまの。一様よあまの。親の苗四郎八郎の。引太郎といひ。のを當家の  
 小斬よまねく。まを。これとて。看所を牛八の。に及も。い久。おる。よ忘野の  
 ほろ。あまの。二人との。砍殺され。とを。告。あまの。僕。哀。傷。悲。歎。堪。む。  
 村長里人共侶は走りも死骸を。領主の目代八嶋の。影。兵。の。あまの。  
 此彼と展檢し。僕よ示は。あまの。を。害。せ。五頭平といひ。盜賊。五頭平  
 とも。擲。捕。して。既。獄。舎。に。繋。れ。う。原。是。言。見。等。類。あり。と。あまの。の。と。あまの。  
 首伏の赴のま。定ら。あまの。再。穿。鑿。せ。れ。あまの。の。首。せ。ら。う。あまの。と。軀。を  
 死骸を遮り。あまの。あまの。あまの。亡骸を親族に任用して。そが。赤貝の。郷。よ。へ。  
 い。吉見。あまの。の。雙。言。を。索。ね。て。あまの。と。あまの。の。僕。は。只。の。郷。を。心。あ。て。よ。  
 あまの。の。と。あまの。の。名。を。あまの。の。冠。者。あ。や。音。さ。り。ん。三。三。ぬ。あ。相。譚。ん。と。あまの。

その名をかくる宿所も定らざらん。あまののすせとよくいひてを逃り又  
 某を死骸のほろへ遣ふ。稍黄昏なりしう。天の祐と竊み飲ひ彼如く赴く  
 おもひちして歩道を走ると瞬息に危窮を告ぐるをばう。方は是神明  
 佛陀の冥助よこそと正首は意中の機密を脱示せば。後主は感佩しく  
 霎時嗟嘆の声を絶む。さうその時。彼癖者五頭平とやんと生拘りし時。其  
 殺されたるそのれ共の誰やある。あまの由縁ありしに。ばけは殊更によ使あり  
 彼奴これと主後がまはるは定らざらん。あまの有也。此の関をなす  
 縁頼の雨をさきと引閉て殺されたる僕が親と後才といひ。ひの裡面を  
 めあり。食糞地て色を失ひ行燈の灯は向て暗を定めく。く視るよ。  
 便是別人ありむ。いねる比刃の暇を乞て赤貝の御より。蒙二郎のれ。こ  
 いちと再び果して面を見あはり。あまの當下蒙二雨戸を引閉。端行る  
 裾をかろして。潜りく進み入り。力祢们との驚。あまの僕竊まらぬ。う。  
 おか。あまの。一様よあまの。親の苗四郎八郎の。引太郎といひ。のを當家の  
 小斬よまねく。まを。これとて。看所を牛八の。に及も。い久。おる。よ忘野の  
 ほろ。あまの。二人との。砍殺され。とを。告。あまの。僕。哀。傷。悲。歎。堪。む。  
 村長里人共侶は走りも死骸を。領主の目代八嶋の。影。兵。の。あまの。  
 此彼と展檢し。僕よ示は。あまの。を。害。せ。五頭平といひ。盜賊。五頭平  
 とも。擲。捕。して。既。獄。舎。に。繋。れ。う。原。是。言。見。等。類。あり。と。あまの。の。と。あまの。  
 首伏の赴のま。定ら。あまの。再。穿。鑿。せ。れ。あまの。の。首。せ。ら。う。あまの。と。軀。を  
 死骸を遮り。あまの。あまの。あまの。亡骸を親族に任用して。そが。赤貝の。郷。よ。へ。  
 い。吉見。あまの。の。雙。言。を。索。ね。て。あまの。と。あまの。の。僕。は。只。の。郷。を。心。あ。て。よ。  
 あまの。の。と。あまの。の。名。を。あまの。の。冠。者。あ。や。音。さ。り。ん。三。三。ぬ。あ。相。譚。ん。と。あまの。

うきひきつて疑ひもつたあはれも背にゆり入る庭に立在りしはめ知る事なき  
 んとせんとくたがしう人老刀野の奸計主君の厄難救へてその密談の端  
 ぬし外ハ絶てあるのみおれ親の仇ハ主君の讐言をどのを惑ひの釋あがり  
 土民の鍾盤めて足利殿の具負ぬ刀野は悲ハ復されど切て故主の先途を  
 ぞむうり心せうくゆりもせむを推問くうち登りしより用ひるさうあわ  
 主恩よ報しも人仰つけられしと頼りて清く己が美邦も廣光も景宗  
 莫賞一年來汝が老実ある志とよくあうれば密談を交するも聊疑  
 然ながら親を慰せ後中を慰せし心の憂ひ切あべしうしく還りて亡骸を  
 葬せむと叮嚀し愉せむも葉二郎ハ主君の之心りほ立退りぬるまじく  
 おを送つひも人それもさぬぬりのあふ途までも俱く史と頼りて己が  
 井平ととも推禁め志のさうとあはれも無差の言葉は時移らば後悔其れ

たちぞし。時夏その性狐疑多るを故めて其よりくまで心をゆるえやこの  
 人よ妙れらるその一人ハ年とあり。是則引太郎あぞ。既深痕を負ひながら  
 砂飛研を打うけく脱去んとしうと其れを慰とあう。是をの深痕灸所  
 なく。脱れがたをあとに。よりて時夏某をあむりも疑ふとなく腹心を  
 あうせし。ハ遂は婢あよ及べし。所詮某ハ冠者ハ俱く甲夜の向ハ他郷は  
 走らん葉二郎ハ三三の内室浅良井のを扶引たその子小三を春よ負て  
 赤貝の宿所は伴ひあうく藏して相俟べし。江生ハ且く留めて舊縁家財を  
 集り赤貝まで退けて内室子息を相伴ひ冠者よ追著ぬ。室平が影兵  
 どの吉見の二字を脱半ハ対の兵夜の中よりち向人も量ぐじしためし  
 めふとくハと只管は將火せバ主従この後ハ隨ひつ廣光ハ遠く土庫に貯禄の  
 金出。あられバ美邦これを配分してその一包を腰に纏又三包ハ廣光夫婦

井平ホガ腰纏させその下包の遺しをぬい奴婢より取せぬこの餘  
 沙金十兩あまりありたるを親従才の香真葉二郎より先足弱を  
 落さんとも美邦廣光齊一件の密後を浅良井と説示してとく落  
 よといそぐせバ浅良井の絆の趣をあらわすて侍と云くありけり  
 騒ぐも睡臥する小三を横ぎる抱きたて藁二郎は肩をいそげや  
 急げ焦燥良人よ辞別を際とあり裳高く引掲ぐ三人つは立三品  
 夜の闇の枝折の庭櫻肩より散る花の白ひと袖よりあまぢ折戸を  
 開けて走去り當下美邦ハ井平が謀るに任して猛ハ廣光して額髪を  
 剃落させ衣裳を更割菴を腰より草鞋の紐を結び又廣光を招き  
 近づけ往方ハ他所を求めんや加賀の小松は赴くべし美秀今ハ彼外  
 ありぬ汝達遙は後とも佐味竺内ガ宿所ハ集合よ只禍を未然ハ

避て主従恙ありんぬいはれはまた慶びほほくおてと出よしのむさ  
 延うとも汝達夫婦ハ失ちあはる存命なくも心ぬりそろぬやと懇切ハ  
 揃せバ廣光目を表ぐた某のハあむりも心ろあけぬいと翠追著るん  
 出させぬと慰めて井平ハ主の之路次のみき憑むありあるを察して  
 井平ハゆめ及ぶと諾ひて美邦は従ひてそや外面ハ立どが庭門より引  
 去して廣光より對ハ大約越路へ起く捷路あり岐道多し只今吉むハ  
 不便ハ上野より信濃の戸隠越後を投て追著るもあひぞといひあむ  
 飛が似くよ走去まば二更の鐘ぞ音をなり廣光ハ吻と息をつきて庖福の  
 うよ出てるる奴婢ハ絆の赴を猜しんとのが雜具を運び出つづの程ふら  
 逐電して人ひさうもさるとかれば柱に倚り嘆息しひびみおれ者共ハ  
 と惜むよ足ねども彼ホガ口より絆洩れて主君のこ人を早あられハ途まが

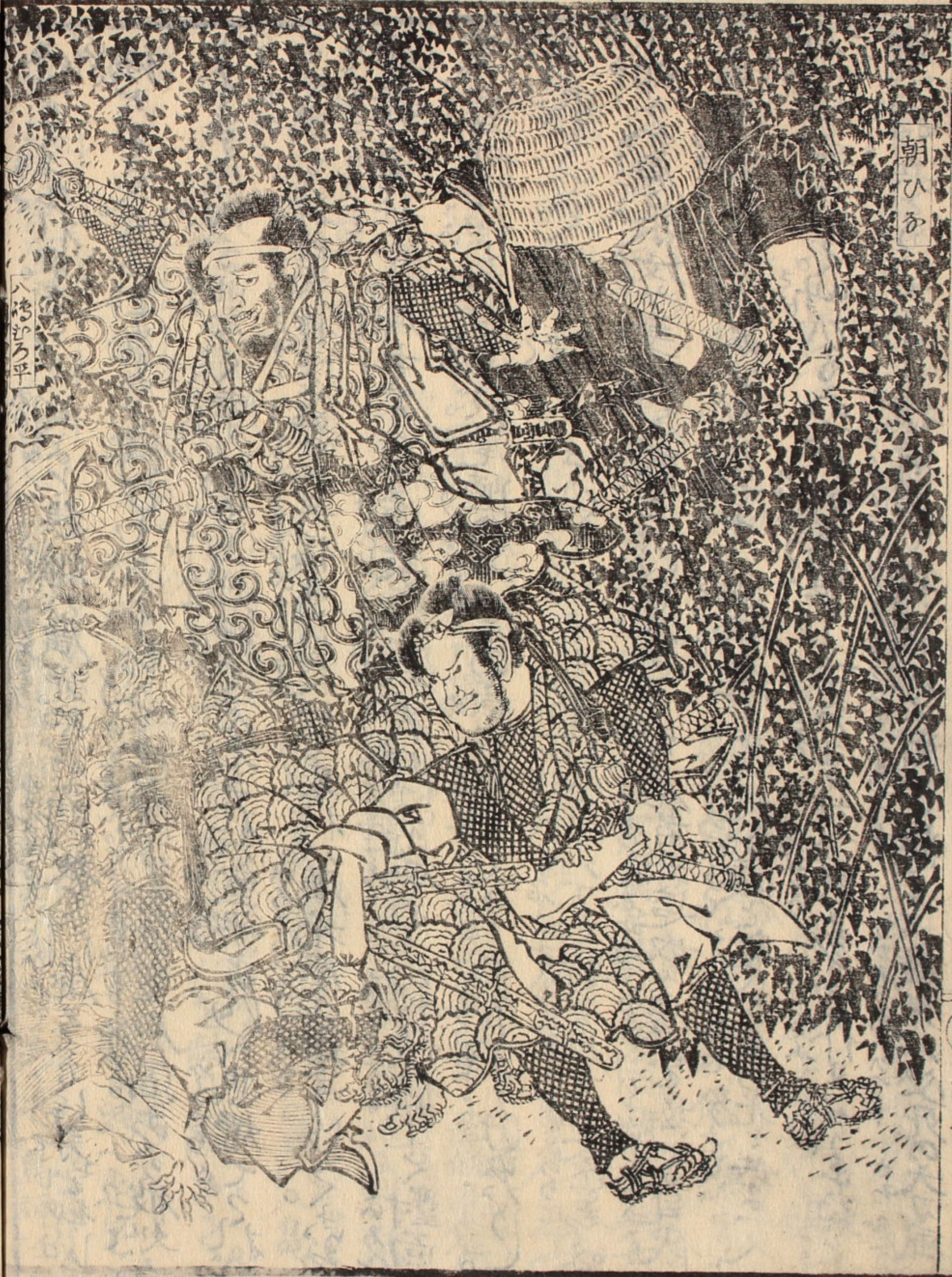
み心ゆくし。さうして大厦の傾くとたよ一本をもち柱に只天運は任せん小はと  
 るとをばらつて心あづうよえ苦く物う納めてふ房の床子は燈と飾  
 書齋の菅家の画幅を懸き青磁の筥は松と桜の竹條と活  
 る。これなど主君二代の薄命人の徳言止とたよき寃屈を歎くわだつて討の兵士  
 らも向ひ時移るまで防戦ひたたくまでも後やまなく主君を延しきんと  
 外又他支もなしとの律の為休往時治承四年の夏五月十四日の真夜中三條高倉  
 宮の御所中て討の檢非違使光長兼成軍兵をて五十餘人を立地は殺散  
 せし長兵衛尉信連は方さうもあさるるがくこの曉がこみ足利の目代八島  
 室平師任は四十人の雜兵をて美邦の宿所をう巻き衡門を頻に敲きく。  
 閑よとひ声は待儲る廣光ハ精悍ち躬拵して刀を取て腰を跨へ走  
 せし惟と問室平ハ声はく吉見冠者美邦は訊問べきありて八島師任

みづりすれましく閑よと焦燥ハ廣光やぐ門放て門扉もに身を  
 誘ふをこといふもまきむむとくも入て書院子舎便室庖福あ彼処  
 とむるもに残る曲なく索れ美邦絶てんえがら室平あはく焦燥てくれ  
 をや逃さ外に搜せと雜兵共侶奮の如いぞ来れ廣光怒は堪りひく  
 狼藉の師任ぬ。郷士らも源家の一族義邦の所要あへ礼儀儼く對面  
 せて綽の仔細も説き尾陋の舉止の意をいせ一人は笛守うけあひし。  
 廣光かくていへそが隨うへえやといはせも果は室平ハ丁と睨で声う立余を  
 下郎か原來汝が美邦を躲さは落せしあん者共這奴が骨を扱て首伏  
 させよと敷圍がけあつと左右あり立掛んとする処を礮と怒る光と共一人  
 眉間を破られ叫びもあは仰反殪しうせカよ又二人段あて仆せし  
 騒ぐ夥兵も八方より推取圍て搦捕んと競ひ懸は廣光ハ必死の大刀風

勇を奮て 義秀 廣光 くらふ

義邦の 圖説を 第五の 巻ま えて

朝ひか 草夷二編卷四



廿七



度みつ

明鏡二編卷四

廿七

多勢を敵より難立刈立是首ありは彼起り隠れ秘術を盡せ瞬間  
 九人ノ疾を負い三人矢庭は破伏せしこの勢ひ色め立立ち多勢の中は割て  
 入門外へ衝と走られ彼逃せかと室平ハ頻に夥兵を駆立て透間も追躰う  
 廣光命を惜むおねどかほ美邦を志ひの隨は遠く延きと多入り且戦ひ  
 且走りて三町乾ある竹藪を盾としその処は踏をまり反る大刀を推直して些も  
 撓む戦の程は春の夜も短くてや東雲もなかりたり廣光あろ悍と  
 いごのその身鐵石よわがしん數刻の苦戦は腕疲も天も明ハ脱れがじと心  
 まもく焦燥まよひ毛竹の根は踏切て忽地挫と轉輾はるるや応と西三人  
 先とせり累もて繩をうけんを聞かおろし廣光ハ臥つても足を揚る突倒し  
 刻としてハ筋斗を撲せを起さへく移るかん室平ハ夥兵おろし遊さんとせ  
 移るは數のくさるおせありのばし變て廣光ハ頭をくんとする程は誰と念お

藪の中より猿臂を伸して室平ハ項を奪ふと引攬も反あまり投退れを  
 驚く夥兵も左右を退れ呆れて藪をうち熟視も竹さやくと搔  
 へたぐまの半身をあらはせ是則別人あるは朝夷三郎美秀ハ蘭鐵の  
 笠を脱捨て溜と覗眼の光も夥兵おろしと魔てそがま地上はなごり  
 伏し室平ハ進んとする項骨を遣らぐ腰さへ抜けて起るは但見盛暑の  
 土狗土中を覆死おさし更し日影もむらぶが如く又彼白昼の群鼠墓るく  
 その巢を毀られて猫のほろりよ出るは似たり廣光ハひらけや美秀は  
 救れて遷しく身を起しおろし朝夷何の程ありあへ来ませし寔は  
 不思議の再会といふは美秀も点隙竹踏打の歩を某途までとあれ藪  
 の存亡をたゞ眺むけ走來れを見く息を喘と世言多く動懸て騷亂色もるけ

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之四終

